

1 報告地区：函館地区

2 事例報告学校名：函館市立桔梗小学校

3 報告者職・氏名：校長 宮越 忍

4 キーワード：「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざした授業改善

1 はじめに

本校は、函館市の北側、函館市と道央を結ぶ国道5号線の函館市街への入口部分に位置する、児童数720名、23学級の、今年開校136年を迎えた歴史ある学校です。

昨年度、渡島教育局・函館市教育委員会の研究指定を受け、「アクティブ・ラーニング（A・L）」の視点からの授業改善に向けた「アクティブ・ラーニング推進事業」の先行実施校として、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した研究を行う機会に恵まれ、実践を進めてきました。

2 昨年度の実践 ～授業の中でアクティブになった・なっている18の児童の姿～

昨年度は、単元全体の流れを大切にするとともに、授業過程を「め・じ・た・ま・ひ」と統一し、授業の目当てを明確に提示し、自力解決・交流を行い、まとめは子ども一人一人が行うこととし、全学級で実践を進めました。

また、明星学苑教育支援室長 兼 明星大学客員教授 細水保宏先生を講師としてお迎えし、多くのことを教えていただきました。細水先生には、授業力を鍛えるための三つの視点、「授業観～どんな子どもになってほしいのか、どんな授業をしたいのか～を持つこと」「教材研究力～教たい内容、育てたい力を明確にする～を鍛えること」「学習指導力（指導と評価を行う力）～一人一人を捉える眼、一人一人に応じた指導ができる力、価値付けし、それを伝えることができること～を鍛えること」とともに、本校として授業を通して主張することは何かを明確にしながら実践を進めていく指針をいただきました。

昨年度の実践を通し、右にある“授業の中でアクティブになった・なっている18の児童の姿”を皆で共通理解し、これらの姿が子どもに見られた時、教師のどのような手だてが良かったのかを確認し、また、そうならなかった場合は、何が悪かったのかを具体的に考えていく中で授業改善を図りました。

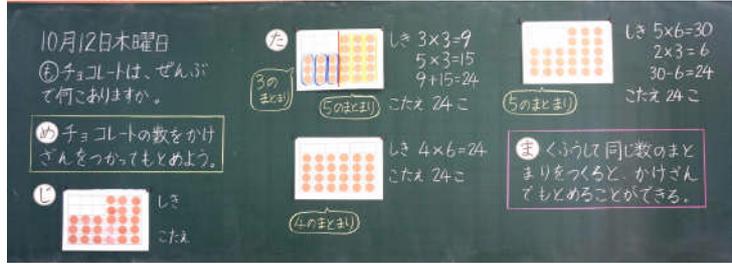
授業の中でアクティブになった・なっている18の児童の姿

- 1 「気づき」の発言があった時。
- 2 表情が変わった時。
- 3 発問にすぐに反応した時。
- 4 すぐに操作活動に取り組む姿が見られた時。
- 5 児童の発言が教室に溢れた時。
- 6 真剣に話を聞こうと顔を向けている時。
- 7 自分の考えを書き始めた時。
- 8 真剣に悩んでいる姿が見られた時。
- 9 いろいろな方法を試している姿が見られた時。
- 10 自分たちで相談を始めた時。
- 11 鉛筆の動きが止まって、自分の書いた考えを見直し、次の行動に移った時。
- 12 学習の継続を望む声があった時。
- 13 黒板に自分の考えを貼った後、他の方法でも取り組もうとさらに用紙を持っていった時。
- 14 自力解決が難しい子が自ら進んで交流に参加し、理解しようとしている時。
- 15 わかっていない子に必死に説明している時。
- 16 積極的な交流（比較・検討）をしている時。
- 17 板書を参考にしながら、自分の力で学習をまとめようとしている時。
- 18 学習したことを生かして適用問題に取り組む姿が見られた時。

3 今年度の実践 ～深い学びとなっている児童の姿～



10/12 公開研究会授業



2年生 板書

確認した“授業の中でアクティブになった・なっている18の児童の姿”から、今年度、さらに子どもがアクティブになるよう授業実践が進みました。

4月。「子どもを授業の主役」にするために、「研究の視点」を①児童をアクティブにする教師の発問・発言②児童が自力で解決に見通しをもてる「問題との対話」③適切に児童と児童をつなぐ教師の「調整・促進力」④振り返りと授業の構成、としました。また、A・Lを支えるものとして、学級づくり・板書の大切さを改めて確認しました。

授業の表面上のアクティブさが際立っていても、最終的に学びの深まりがなければ意味がありません。対話的な学びを通し、授業の中で「深い学び」となっている子どもの姿を右のようにとらえました。さらに、学習のまとめを子ども自らが行うこととしました。それにより、学びを深めることにもつながると考えたからです。低学年から、主語や述語を指定してそれに続く文章を考えさせたり、大事な言葉を穴埋めにして考えさせたりするなどしながら、最終的には全てを子ども自身が書けるように指導を行いました。

10月12日の公開研究会へ向け、1学期から学年団で指導案検討を重ね、プレ研を行いました。プレ研が進むごとに、授業が研ぎ澄まされていく様子を見ることができました。教師の授業力向上という観点から考えますと、この学年での取組により、学習のねらいを明確にし、子どもがやってみたい、解いてみたいと意欲をもち“わくわく、ドキドキ”するような教材、提示の仕方などの「教材研究力」、「子どもをアクティブにする発問・発言」が鍛えられました。また、教師自身が子どもに確かな学力を育むために「授業の構成と振り返りまでの時間配分」の大切さを実感し、1時間1時間の授業の中で実践されるようになったことは大きな成果であったと考えます。

深い学びとなっている児童の姿

- 1 「わかった!」「できた!」「あっ、そうか。」
(知識・技能の確実な習得)
- 2 「それもいいけど、これもいい。」
(自分と違う考えを判断する)
- 3 「こっちの方が、～。」 (比較・検討)
- 4 「あっ、ここが違った。」
(自分の考えを冷静に見直す)
- 5 「前に勉強した～を使って考えよう。」
(知識・技能を活用する)
- 6 「だったら～。」「～も知りたい。」
(発展的に思考する)

4 おわりに

「教師が変われば子どもが変わる」。2年間の研究指定校としての取組を通し、この言葉を強く実感しました。「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、「子どもが授業の主役」となる授業づくりを行うことにより教師が変わり、授業が変わり、子どもが意欲的になったことを感じます。さらに、研修部を中心に授業者を支える学年団が組織的に授業研究を行えたことは、本校にとって大きな一歩でした。本校の取組が確かな学力となり、これからの社会を生きる子どもの幸せに少しでもつながるよう、今後も取り組んでいきたいと思ひます。